

比較民俗学の可能性と課題

—日本と中国の金魚飼育を題材として

野 地 恒 有

一 比較民俗学の可能性

本稿では、まず、比較民俗学の方法論的な問題を検討して、その研究に対する認識と方法の転回を提起する。そして、日本と中国における金魚飼育を題材として比較民俗学的研究を試み、飼育技術から抽出される自然観による比較の枠組みを提示するとともに、その自然観における質的な相違を明らかにする。

比較民俗学とは、日本の民俗学が一国民俗学として日本国内を研究対象とすることを強調されたのに対して、一国民俗学の発展として日本以外の民族や国家との比較が意図された研究のことである。佐野賢治（一九九六、一九九八、二〇〇〇）は、いくつかの概説書や解説のなかで比較民俗学についてまとめている。そこでは、日本の民俗学の研究方法には、国内の比較研究法の比較と比較民俗学における国外との比較があり、この二つの比較を柳田国男は段階論で論じたとくり返し述べられている。

る。

いいかえれば、この二つの比較とは、前者は等質文化内の比較であり、後者は異質文化間の比較である。そして、柳田国男が意図した国内の比較は、帰納法を意味した（関 一九八七・一一八―一九九）。柳田の『民間伝承論』では、日本国内における比較について次のようにまとめられている。「狭く限ったこの研究地域は、すなわち全国的な比較総合のための基礎の単位」である。民俗学を達成するためには、各地域から採集によって得られた資料の部分部分の記述や分析ではなく、総合が必要である。民間伝承資料の採集・分類・索引・比較・総合事業が整備された彼方に「世界民俗学」が実現される（柳田 一九九〇・三〇〇、三二四―三八一）。ここでいう比較・総合が帰納法のことである。各地域の民俗現象をできるだけ多く採集して集積させ、比較総合する。つまり、帰納的に共通と差異を指摘して、総体としての文化や歴史の変遷をとらえるのである。

佐野の比較民俗学的研究を見ると、日本、中国、韓国におけ

る橋に関する民俗要素を集積させて提示し、比較綜合して、橋の境界性・両義性、シャーマニズム、修験道、仏教、道教儀礼という観点から「通文化的な要素と個別的な要素」を指摘している。また、下野敏見の比較民俗学的研究を見ると、日本国内における圧倒的な量の調査資料を提示し、比較綜合して、民俗要素の分布を周圍論として解釈する。さらに、その発展として国外へ分布域を拡大していく。たとえば、その結果次のような指摘となる。

「日本のトカラ以北ではU字形の片口箕を使用し、トカラ以南では円形の丸口箕を用いる。丸口箕は台湾、フィリピン、インドネシアでも用いられ、片口箕は韓国、中国北部でも用いられている。このように東アジアを南北二つに割って民俗が違ふことも比較民俗学の中では注意しなければならぬことである。」(下野 一九九四・三三三)

佐野が日本の民俗学の方法において存すると述べた二つの比較は、質的に異なる比較法である。しかし、以上の佐野自身や下野の比較民俗学的研究でみられた国外との比較の方法に、国内における比較との質的な違いはみられない。国内の地域研究により資料化された民俗要素をできるだけ多く集積させ、比較綜合して地域的な共通と差異を指摘し、その延長として、国外に採集地域を拡大して、事例の集積・比較・綜合が繰り返される。比較対象地域は拡大されるが、日本、中国、韓国という範囲は、集積された民俗要素の群に対する大分類か中分

類のくくりを示しているにすぎない。

さらにいえば、それらの研究は、内容や外形が似ているとあらかじめ判断された民俗要素の比較である。比較民俗学では、民俗要素の比較ではなく、民俗要素の束として把握された構造や体系を比較するということはすでに指摘されてきたところである(千葉 一九七六、宮田 一九七八、桜井 一九八七)。比較民俗学は文化の体系的、構造的な把握を前提とする。しかし、佐野や下野の研究では、外面的な相似によって集積された民俗要素を比較して、その分布や相似形間の差が指摘されているのである。

宮田登(一九七八・一三四―一三九)は、限定された地域社会の個別の民俗文化を分析して、構造的に把握された「民俗の型」を抽出することを目的とする地域民俗学を構想した。ここで抽出された民俗の型と日本文化との関係は、「日本全体に操作していく前の段階で終了させてよい」として、地域研究の結果を日本全体に操作させずに、地域における民俗文化の構造を分析することが提起された。

千葉徳爾は、宮田の地域民俗学に対して、「日本国内の小地域の民俗文化構造を綿密に分析考察していくような民俗誌の作成という方向で、国際的または他民族的な意味での、比較民俗学というわれわれの究極目標は達成できるのであろうか」(千葉 一九七六・一二六)と疑問を提起しつつも、「日本民族としての文化研究の成果としてこれまでの日本民俗研究を無視し

ないとするならば、地域民俗誌はどうしてもそれらを仮設的にせよモデルにとつて、これを基準とした全国民俗文化の中に、郷土を位置づける作業にまで、つまり『北小浦民俗誌』の段階にまで作業を進めなくてはならない」（千葉 一九七六・一三〇～一三一）と、その方向を示した。

千葉のいう『北小浦民俗誌』の段階」とは、千葉が『北小浦民俗誌』を分析して明らかにした次のような結果を示している。

「特定地域のそれぞれの民俗事象の位置づけ」「民俗事象相互の作用連関―引用者注、以下同じ」、順序づけ「民俗事象の推移変遷の過程」がなされたうえで、再び全国各地域が対比され、この手続きをくりかえしていつて、それらの間に矛盾が起こらなくなれば、日本の民俗の発達変遷の順序はほぼ確かめられたことになる。そうして、各地民俗事象の変遷過程、それに及ぼした作用、条件に普遍的なものがあるが認められるならば、それらは民俗学の法則ともいい得ると柳田は予想したのであろう。（千葉 一九七六・一一〇）

『北小浦民俗誌』によって柳田は小地域の生活史をとおして民俗変遷の法則を提示した。千葉は、地域研究は『北小浦民俗誌』の段階」つまり「民俗学の法則」の抽出まで進められなければならないとする。地域民俗学の論理をおしすすめることにより、広域の住民に普遍的な民族的文化を明らかにできるかどうかが焦点となるとも述べられている（千葉 一九七六・一

二五）。

『北小浦民俗誌』で提示されたこの法則は、地域研究の結果ではなく、あらかじめ用意された結論―柳田の夢想から産みだされた創作―であったと断ぜられた。しかし、新潟県佐渡島の一漁村の事例を通して民俗変遷の法則を導き出すとする柳田の構想は、国内各地域の民俗要素の集積と総合（帰納）²³によって日本文化をとらえようとする手法と大きく異なっている。比較民俗学の第一の前提として、単体の民俗要素を集積させ、比較総合（帰納）していくことによって総体としての文化をとらえるという手法を転回させるべきである。

第二の前提として、一国民俗学の進展の彼方に比較民俗学を位置づけるという認識を転換させることである。比較民俗学の進展には、出発点において、日本と日本以外の国家や民族との比較のための枠組みが設定されなくてはならない。

先にあげた宮田の構想した地域民俗学を進展させていえば、地域民俗学は民俗要素の構造的、体系的な把握によって抽象化された法則、論理、原理を剔出することを目的とする。比較民俗学の第三の前提として、この地域研究の成果としての法則、論理、原理において比較を展開させることを提起する。

地域研究において文化の構造、体系を抽出して、そこから法則や原理を見出す研究の例をあげてみよう。梅棹忠夫（一九五一）は、主体と環境の関係が「ある条件のもとではある発展がおこなわれるという、一種の法則性」を導き出すことを目標と

して、鹿児島県上屋久町一湊の調査を行った。そして、辺境、離島、島津藩直轄による隔離という条件下において、「ふるいかたちのコミュニティ」のなかに「はだかの血縁原理の平均化作用」を抽出した。「はだかの血縁原理」とは「血縁原理が階層性と結びつかないでいきている」ことであり、この原理の機能として、「血縁内に異質な分子が析出してくることをつねにさまたげ」、コミュニティ内部を階層化させない「平均化作用」がある。さらに、この作用は「グループ保存の原理」を背景としている。「グループ保存の原理」とは、「グループには、それをひとつのグループとして保持し、その分裂をさけ、内部に異質な要素が分離してくるのをさまたげる方向に、各種の力がはたらいてゆく、という原理」のことである。この原理を背景とする「平均化作用」が、ながい隔離によって自己発展的に形成されてきたクライマックス・コミュニティの性格であると、彼は結論づけている。地域研究から社会の構成原理を明らかにした。

屋久島の一漁村を通して日本の漁村・沿海文化の法則や原理をとらえる。日本全国の沿海村をくまなく見た上でなければ日本文化論は構築できないということではない。梅棹の研究からいえば、地域研究とは一地域から日本文化論を構築することと極論することも可能である。しかし、宮田は、地域民俗学の対象となる地域社会の範囲を、神社祭祀圏や「生業構造のあり様から規制される地表」と広域に設定したことにより、地域研究

の対象地域の範囲が不明瞭になってしまった(宮田 一九七八・一四八)。そこで、筆者は、地域研究ではなく、地点研究を提起する。地点とは、研究者個人が主体的に研究を進め、法則、論理、原理を提起しうる空間的な範囲のことである。比較民俗学の確立のためには、地点研究により、民俗要素の束を構造的、体系的に把握して法則、論理、原理を見出すことが研鑽されなければならない。ただし、千葉(一九七六・二二五)が地域民俗学と国家や民族との関係について問題を指摘したが、この地点研究についてもその問題は残されている。

桜井徳太郎(一九八七・五四二)は、比較民俗学的方法として、「民族の民俗文化体系を心残りなく調査し尽くして、個々の要素のもつ意味を文化体系全体の中で十分に検討したのち、その構造的特質を剔出し、しかる上で初めて比較の作業にとりかかるべき」と述べている。この見解は、「柳田の比較民俗学への展望を踏襲するものとして、日本民俗学界で認められているもの」と宮田(一九七八・二二二)は位置づけている。しかし、ここで強調しておきたいのは、日本文化体系という総体があらかじめ地点研究の外に存在しており、そこに地点研究の成果を集めて位置づけていくのではない。地点研究をおしはじめて文化体系は構築されるということである。その上で、地点研究の結論として剔出された法則、論理、原理において、比較民俗学の比較は進められねばならない。

二 比較民俗学の課題としての金魚飼育

金魚の飼育技術を比較民俗学の課題として位置づける。金魚は、硬骨魚綱コイ目コイ科フナ属のアジアブナ (*Carrasius auratus auratus*) から作出されたものと考えられている(牧野一九七〇、鈴木一九九七)。金魚は突然変異や交雑により多くの品種が出現した。キンギョやその品種の表記に当たって、日本と中国との比較を意図していることにより、また、文字自体がその性質を寓意していることにより、本稿では漢字表記とする。日本の品種の漢字表記は松井(一九六二)と鈴木(一九九七)によった。

(一) 金魚飼育の歴史

日本の金魚は、一六世紀のはじめに中国から伝来した(後述)。まず、中国の金魚飼育の歴史について、王(一九九四・一〇七)をもとにまとめよう。王は、金魚の起源を示すものとして、『述異記』(五世紀後半の作)の「晋[四世紀] 桓冲遊廬山、見湖中有赤鱗魚、即此也」を取りあげて、これを最も早い年代の金魚の出現を示す現存資料としている。現在に至るまで金魚の歴史は一六〇〇年から一七〇〇年に及ぶことを強調する。そのほか、『赤城志』(一二二三年)、『咸淳臨安志』(一二六五年)

(一二七四年)などの文献をあげて、晋朝に「赤鱗魚」が文献に現れて以後、野生の紅黄色の鯽魚が山間の水辺地域に見られたことを示している。

王は、金魚飼育の前史として、汪汲の『事物原会』を引用して、「唐肅宗乾命中天下置放生池八十一所、是放生始於梁而置放生池於唐也」と、唐の肅宗乾の時代(八世紀中期)に放生池が八一カ所に作られたことが記載されているのをあげた。そして、神秘的な色彩をもった「金黄色鯽魚」も放生の対象となつたであろうとして、これを金魚の「半家養時期」の開始としている。次に、金魚飼育の歴史つまり「家養時期」を「家池養育時代」、「由池養到盆養過渡時代」、「盆養時代」、「有意識人工選択時代」、「雑交育種時代」に分けて整理している。

「家池養育時代」とは、南宋代(一二二七～一二七九)、家の池で金魚を飼育することが開始された時代のことである。当時の支配階級の人たちは金魚を飼育する池を家に造築した。この時期には、汚水の中の「小紅虫」が金魚の餌となることや、繁殖の方法も知られていた。

「由池養到盆養過渡時代」とは、南宋以後、一二八〇年から一五四六年まで、家池で飼育される時代から盆で飼育される時代への過渡的な時代のことである。

「盆養時代」とは、一五四七年以後、盆や缸(陶製の容器)で金魚が飼育されるようになった時代のことである。陶製の容器による金魚飼育の規模は小さくとも可能であるので、金魚を

飼育する人数や地区が増加拡大した。一五四七年から一六四三年の間に、金魚の新品種として、五花、双尾、双臀、長鱗、凸眼（龍睛）、短身（蛋魚）が現れた。

「有意識人工選択時代」とは、一八四八年以後、意識的に金魚を選別する飼育が行われた時代のことである。『金魚図譜』（一八四八年）には「稚魚の時には雄魚は佳品を選び、雌魚は色の出方の大きさが等しいものを選ばなければならない」とか、『金魚飼養法』（一八九九年）には「金魚は必ずはつきりと分けて飼育しなければならぬ。墨龍睛と紅魚をいっしょの水槽に飼ってはいけない。いっしょにすれば色が変わってしまう」などと書かれている。良品の金魚の稚魚を選択して飼育して、繁殖期にはそれで交配を行った。このような飼育がくり返されて、良品は商品として売りに出され、不良品は淘汰された。一九二五年までの七七年間に、墨龍睛、獅頭、鸞頭、絨球、朝天眼、藍魚、紫魚、翻鰓、珠鱗、水泡眼の新品種が出現した。「雑交育種時代」とは、一九二五年以後、異なる品種を交雑して、新品種を作り出した時代のことである。たとえば、藍龍睛と紫龍睛を交雑して、紫藍龍睛という新品種が作り出された。五花龍睛は透明龍睛と各色の龍睛を交雑した結果作り出された。その後現在に至るまで、この交雑の方法によりたいへん多くの新品種が出現してきている。

日本における金魚の魚類学的及び文化史的研究は、もっぱら松井佳一によって進められてきたと言つて過言ではない。松井

（一九六三、一九七二）をもとに、日本における金魚飼育の歴史をまとめてみよう。日本へ金魚が中国から輸入された年代を示す記録の中で、文亀二（一五〇二）年が最も古い。これは、寛延元（一七四八）年刊の「金魚養玩草」の記載にもとづいたものである。そこには、「或老人の云、金魚ハ人王百五代後柏原院の文亀二年正月廿日はじめて、泉州左海の津にわたる」と書かれている（安達 一九九七・四二四）。そのほかにも、元和二（一六一六）年や元和五（一六一九）年に伝来の記録があるが、松井（一九六三・一〇〇）は、「文亀二年に初めて伝わり、移入は数度に行なわれた」と推測している。

日本で金魚の飼育という形態が見られるようになったのは、江戸時代の初期、支配者層や富裕層においてである。元禄年間（一六八八～一七〇三）以降に庶民の間に金魚の愛玩が流行した。先にあげた「金魚養玩草」は、この時期に刊行され多くの異本を生み広く読まれた。文化文政年間（一八〇四～一八二九）には金魚の品評会が開かれ、金魚の番付が発行されるほどになった。日本の金魚飼育は、江戸時代の初期（一七世紀はじめ）に一部の階層に形成され、元禄年間（一七世紀の終わり）に庶民の間に普及し、文化文政年間（一九世紀はじめ）に完成したといえる。金魚飼育のほかに、文化年間から天保年間（一九世紀前半）には、奇抜な形を競う変化朝顔栽培を始め、籠のなかのコマネズミや小鳥の飼育、鉢植えの草花栽培が流行した（鈴木 一九九七・二三四）。君塚（一九九五）は、この草木・花

卉栽培の流行を「近世園芸文化の発展」ととらえている。

日本へ中国から金魚が輸入された文龜(一五〇二)年は、先にまとめた中国の金魚飼育の歴史によれば、明代、家池で飼育される時代から盆(陶製の容器)で飼育される時代へ代わっていく時代(一二八〇―一五四六)に当たる。また、金魚飼育が庶民に流行した元祿年間は、中国では、清代、盆や缸(陶製の容器)で金魚が飼育されるようになった時代(一五四七―一八四七)に当たり、それは金魚飼育が拡大した時代である。金魚飼育のほかに、中国における動物飼育の研究を見ると、菅豊は、湖羊という特異なヒツジ飼育の形成過程において、自然を人間の管理下へ内包していく欲求と努力をとらえ、湖羊が、農耕の高度集約化と商業化が進行した南宋代にその萌芽がみられ、商業的農業が発展する明清代に完成されたことを明らかにした。そして、湖羊だけでなく、「宋代は、花鳥魚虫文化と呼ばれる動植物飼育文化の成立期でもあり、たとえば、金魚の普及、鬪コオロギの普及などのように、農村部に限らず都市部においても自然を内包する試みが行われていた」と指摘する(菅一九九八)。花鳥魚虫文化とは、「小さな……動植物を愛玩し、その飼育・栽培を通して、そこに「自然」を觀賞し体感する文化」のことである。花鳥魚虫文化は都市における文化の発露ではあるが、その形成には、「自然」を消費する都市と「自然」を生産する地方との関係性においてその全体をとらえねばならないとも提起している(菅一九九九)。

江戸時代の動植物の飼育栽培の流行も、中国の花鳥魚虫文化と同様に、江戸という都市社会の形成と密接に関係している。そして、江戸の花鳥魚虫文化の形成は、やはり、「自然」を消費する都市と「自然」を生産する地方との関係性において把握されねばならない。金魚飼育に戻って言えば、日本における金魚飼育から花鳥魚虫文化という体系が構築されねばならない。そして、花鳥魚虫文化という次元において、中国と日本の動物飼育栽培は比較され得る。

(二) 金魚の分類と命名

中国と日本における金魚の品種の種類・分類と命名法について検討して、金魚に対する考え方を比較してみよう。王(一九九四・一八―二九)によれば、中国における金魚の分類と命名法はかなり混乱しており、同一の品種でも地方によって異なった名称が付けられているという。品種の名称の不統一は、分類法が統一されていないことにより、二分類法(龍種・蛋種)、三分類法(文種・龍種・蛋種)、四分類法(草種・文種・龍種・蛋種)、五分類法(金脚種・文種・龍種・蛋種・龍背種)、さらに一三分類法もある。表1は、王が提出した分類である。

表1で示した分類の低位においてさらに細分化されて、品種の命名がなされている。たとえば、Ⅱ文族・1常眼・(1)平頭型・①文系の中で、体色が紅のものが「紅文」という品種と

表1 中国における金魚の品種の分類 (王：1994)

- I 草族 (体型が長く平たく、野生のフナと同形)
- 1 平頭草族
- (1) 窄平頭型
- ①金鯽系
- II 文族 (体型が丸く、背鰭がある)
- 1 常眼文族 (正常眼)
- (1) 平頭型
- ①文系 ②文球系 (口に「絨球」*) ③文鰓系 (「翻鰓」*)
- ④文鰓球系 (「絨球」・「翻鰓」) ⑤珍珠系 (「珠鱗」*)
- ⑥珠鰓系 (「珠鱗」・「翻鰓」)
- ⑦珠泡系 (「珠鱗」・目の傍らに水泡)
- (2) 鰓頭型 [高頭系・帽子系] (頭頂部に肉瘤が発達)
- ①高頭系 ②高頭球系 (「絨球」) ③高鰓系 (「翻鰓」)
- ④高珠系 (「珠鱗」)
- (3) 獅頭型 (頭頂部のほかに両側の鰓蓋部の上にも肉瘤がある)
- ①獅頭系
- 2 龍眼文族 (眼球が突出している)
- (1) 龍眼型
- ①龍系 ②龍球系 (「絨球」) ③龍高系 (「肉瘤」)
- ④龍獅系 (獅頭) ⑤龍鰓系 (「翻鰓」) ⑥龍珠系 (「珠鱗」)
- ⑦龍珠鰓系 (「翻鰓」・「珠鱗」) ⑧龍高球系 (「肉瘤」・「絨球」)
- ⑨龍鰓球系 (「翻鰓」・「絨球」)
- ⑩龍高鰓球系 (「肉瘤」・「翻鰓」・「絨球」)
- (2) 朝天眼型 (眼球が上を向いている)
- ①朝天龍系 ②朝天龍泡系 (眼球に水泡)
- ③朝天龍球系 (「絨球」)
- 3 水泡文族
- (1) 水泡眼型*
- ①鱗泡眼型
- III 蛋族 (体型が短く丸く、背鰭を欠いている)
- 1 常眼蛋族
- (1) 平頭型
- ①蛋系 ②蛋球系 (「絨球」) ③蛋鰓系 (「翻鰓」)
- ④蛋鰓球系 (「翻鰓」・「絨球」) ⑤蛋珠系 (「珠鱗」)
- (2) 鰓頭型
- ①鰓頭系 ②鰓頭球系 (「絨球」)
- 2 凸眼蛋族 (龍眼)
- (1) 平頭型
- ①凸眼系 ②凸眼蛋球系 (「絨球」) ③凸眼珍珠系 (「珠鱗」)
- (2) 凸眼獅頭型
- ①凸眼獅頭系 ②凸眼獅頭球系 (「絨球」)
- (3) 朝天眼型
- ①朝天系 ②朝天球系 (「絨球」)
- 3 泡眼蛋族 (水泡眼)
- (1) 水泡眼型
- ①泡眼系 ②泡眼鰓頭系

- 注 *
- * 「絨球」とは鼻孔褶が肥大して球ようになったものこと。
- * 「翻鰓」とは鰓蓋が縮小してその周辺部が反転しているものこと。
- * 「珠鱗」とは半球上の鱗のこと。
- * 「水泡眼」とは眼球の角膜だけが突出していること。

[注は、(松井 1935) による]

なり、体色が白のものが「白文」という品種になる。Ⅱ文族・
 2龍眼・(1)龍眼型・①龍系の中で、体色が黒で、しかも尾
 鰭が蝶のように跳ね上がっている形をしたものが「墨龍晴蝶尾」
 という品種になる。同じくⅡ文族・2龍眼・(1)龍眼型・①
 龍系の中でも、体色が白で、しかも眼が紅色のものは「朱眼龍
 晴」という品種になる。このように体色、尾鰭の形、眼色など
 によって分けられ、命名されている。王の分類表では、二八〇
 品種の金魚が上げられている。金魚の形態により分類の系が構
 成され、さらに形態や色の組み合わせにより命名がなされてい
 る。

別の分類法を見ると、伍(一九八三・四二〇四)は五分類
 法(金鯽種・文種・龍種・蛋種・龍背種)を採用している。王
 の分類(表1)では文鰓系と高鰓系や珍珠系と高珠系が区別さ
 れていたのに対して、伍はそれらを「翻鰓型」「絨球型」とま
 とめている。その一方で、龍族や蛋族の分類が頭の形(頭の形
 が三角形)や尾の形により細分化されている。しかし、基本的
 には、王、伍ともに、体形、鱗、尾、頭、眼球、鰓、鼻、鱗の
 形状の組み合わせにより分類がなされていることは同じである。
 次に、日本における金魚の分類と命名を見てみよう。日本の
 金魚として、松井(一九七二・二二二二八)によれば、次の品
 種があげられている。

和金(ワキン) 琉金(リュウキン) 鉄尾長(テツオナ
 ガ) 山形金魚(ヤマガタキンギョ) コメット「漢字表記

されていない」 蘭鑄(ランチュウ) 南京(ナンキン)

大阪蘭鑄(オオサカランチュウ) 和蘭獅子頭(オランダ

シシガシラ) 日本鼻房(ニホンハナフサ) 地金(ジキ

ン) 出目金(デメキン)「赤出目金(アカデメキン)、黒

出目金(クロデメキン)、三色出目金(サンシヨクデメキ

ン) 頂天眼(チヨウテンガン) 土佐金(トサキン)

和唐内(ワトウナイ) 秋錦(シユウキン) 朱文錦(シ

ユブンキン) キャリコ「漢字表記されていない」 東錦

(アズマニシキ) 江戸錦(エドニシキ) キャリコ頂天

眼(キャリコチヨウテンガン) 津軽錦(ツガルニシキ)

弘錦(ヒロニシキ) 金爛子(キンランシ)

以上二六品種のうち、中国から輸入された品種は和金、琉金、

和蘭獅子頭、出目金(赤出目金、黒出目金、三色出目金)、頂

天眼の七品種である。そのほかの品種は、日本において突然変

異や交雑により作出されたものである。

日本では、品種の分類は系をなしておらず、品種全体を貫く

一定の命名法もない。たとえば、日本の金魚を王の分類法に即

して分類してみると次のようになる。

草族
 平頭・和金、山形金魚、コメット、地金、朱文錦
 文族

常眼・琉金、鉄尾長、和蘭獅子頭、日本鼻房、土佐金、キ
 ヤリコ、東錦

龍眼・出目金（赤出目金、黒出目金、三色出目金）

蛋族

常眼・蘭鑄、南京、大阪蘭鑄、秋錦、江戸錦

凸眼・頂天眼、キャリコ頂天眼

草族と文族の間・和唐内

日本では、体形の特徴の組み合わせにより命名がなされているわけではない。蘭鑄、東錦、秋錦、和蘭獅子頭は、頭部に肉瘤をもった獅子頭系統としてまとめることもできるが、そのような系統性をもった命名はなされていない。また、和金のうち、尾鰭が四つ尾、三つ尾、フナ尾のものがあり、体色は赤のもの、赤と白の斑のもの（更紗という）などがあるが、これらを区別することもない。ただし、出目金だけは体色により系として下位分類されている。

王のあげた中国の金魚は二八〇品種、松井のあげた日本の金魚は二六品種であり、その品種数の違いは圧倒的である。中国の品種分類は系を構成していたが、日本のそれは系を構成していなかった。

さらに分類された品種の内容を見てみよう。中国の場合、草族、文族、蛋族の中では、文族が一七九品種、全体の六四％を占めている。その中でも、龍眼文族の龍眼型（体形が丸く背鰭のある、出目のもの）にもっとも多くの品種が含まれており、それは七四品種、全体の二六％を占めている。王（一九九四・六、三一）によれば、龍睛（日本の出目金）の品種はもっとも

多く、凸眼（龍睛）は一五四七年から一六四三年の間（盆養時代）に新品種として出現し、その後に出た墨龍睛という品種がもっとも歓迎を受けてきた。

日本では、出目金は明治時代以降に輸入された。鈴木（一九九七・二一〇）は、出目金が江戸時代に現れず見向きもされなかったことについて、「江戸の人々には、金魚の奇形めいた姿の変種を求める気持が、少なかったのではないか。江戸時代には、金魚はもっぱら、優美な『こがねうお』としてのみ、受け入れられていたからではないか」と指摘している。別のところで、鈴木（一九八九・五七）は、日本では、「品種ごとの定形を固定保存しつつ、普遍的な美しさを強調することに情熱が注がれた」のに対して、中国では、「特殊な形質とオリジナリティを主張することに重点が置かれてきた」とも述べている。日本では、金魚の「品種ごとの定形を固定保存」に重点が置かれ、そこに美しさが求められてきた。中国では、金魚の「奇形めいた姿の変種」・「特殊な形質とオリジナリティ」の創出に重点が置かれ、そこに美しさが求められてきた。鈴木によってなされた対比をいいかえれば、日本では、定形化された品種の中に美を深化させ、中国では、変形させてヴァリエーションが増やされた品種の中に美を拡大させるとまとめることができる。この志向は飼育技術にも反映するものと予想される。つまり、定形の内への深化を志向する技術と定形の外への拡大を志向する技術である。

三 金魚飼育の地点研究―定形へ深化化する技術

周達生(一九九五・一一五―一二三)は、民族動物学的な視点から中国の金魚飼育をまとめている。その主な内容をまとめると次のようになる。北京の金魚売りは河北省廊坊地区内の文安県から来る者が多く、彼らは北京の天橋付近の金魚飼育の専門業者から金魚を求めて、それを売っていた。專業の養魚場は、清朝になって金魚養殖の技術が進歩して現れた。金魚売りが売っていたのは、日本と同様、淘汰されるべき金魚だった。日本では、庶民は伝統的に麩を金魚の餌としたが、北京の金魚を愛好する庶民は、ミジンコを餌とした。金魚飼育のベテラン「専門業者のことか―引用者注」は、枝角類のミジンコを「紅虫」と俗称し、橈脚類のケンミジンコの仲間を「炸彈」と俗称して区別する。一般の愛好家は「紅虫」も「炸彈」も区別せずに、「魚虫」と総称している。

金魚飼育の技術は、愛好家、専門業者、販売者の間において、それぞれ異なっていると考えられる。周も、餌のミジンコの分類において、飼育のベテランと一般の愛好家では異なることを指摘しているが、それでも、金魚を愛好する人、専門業者、販売者といった異なった立場からの把握は十分にはなされていない。

石田貞雄(一九九七・七)は、江戸時代の金魚飼育を、①観

賞するために金魚屋などから買い求め、大型の水槽か園池などで飼育するもの、②特殊な金魚を趣味で飼い、自家で採卵・孵化・育成を行ない、優秀なものを得ようとするもの、③主として農業の副業として数種類の金魚を、水田、専用池などで大量生産し、販売するものに分類した。この分類は現代の金魚飼育にも対応する。石田の分類をもとに、現代の金魚飼育は次のようにまとめられる。①金魚を買い求め、一般家庭で観賞用に飼育するもの(一般飼育)、②熱心な愛好家として、自家で採卵・孵化・育成して、少数精鋭の優秀な金魚を飼育するもの(特殊飼育)、③数種類の金魚を大量飼育して販売・出荷するもの(生産飼育)。金魚の飼育技術は、①一般飼育・②特殊飼育・③生産飼育に大別してとらえ、全体的な関係性がとらえられねばならない。販売業者との関係をも含める必要がある。

この中で、③の生産飼育に属する人々(生産者)に注目する。中国でも、生産者側の飼育技術は調査研究なされていない(伍一九八三、王一九九四)。本稿では、愛知県海部郡弥富町の地点調査(一九九八年―二〇〇一年)から、③における飼育技術を提示する。日本では、東京都江戸川周辺、愛知県海部郡弥富町、奈良県大和郡山田市が代表的な金魚生産地であったが、現在、江戸川周辺は産地として衰退している。愛知県弥富町の金魚飼育の始まりは、文久・元治の頃(一八六一―一八六四)、奈良県大和郡山の金魚行商人から前ヶ須村「現在の弥富町大字前ヶ須新田」の財産家へ伝えられたことによるとされている。

(海部郡弥富農業補習学校調査部 一九三二・三三・三八)。

(一) 飼育されている品種と分類

弥富町は日本の金魚のすべての品種がそろえられる生産地とされている(弥富金魚漁業協同組合作成の二〇〇〇年度版パンフレット「弥富の金魚」による)。しかし、その中で主に生産される品種を生産量(尾数)から見ると、和金(六四・〇%)、琉金(一〇・一%)、出目金(五・一%)、コメット(三・二%)、和蘭獅子頭(二・六%)、丹頂(二・四%)の六品種である(一九九六年弥富町金魚漁業協同組合資料による、カッコ内は総生産量に占める割合である)。生産者一人あたりの飼育品種を調査してみると、二〇〇〇年四月時点において、弥富町天王割の車新田地区で金魚の飼育を行っている一四人のうち、一三人が琉金、出目金、丹頂(タンチョウ)、和蘭獅子頭、東錦の五品種を飼育しており、一人が丹頂の一品種だけを飼育していた。生産者一人あたり五品種の飼育が中心であるといえる。

金魚は、体形によりナガモン(フナガタ・ヒラモンともいう)とマルモンに分類される。ナガモンはフナに体形が似ている金魚である。ナガモンには和金、コメットなどが入り、マルモンには琉金、出目金、和蘭獅子頭、東錦などが入る。一般的に分類された品種を体色や形状により細分化する民俗分類はない。しかし、同一の品種の中において、成長段階により、稚魚をミ

ズコ、孵化後一年以内の成魚をシンコとかトウサイ、二年目のものをアケノニサイとかニサイ、三年目のものをサンサイと分類している。さらに、同一の品種を大きさにより、一年目のシンコの中でも、標準形よりも大きいものをトビ、標準形よりも小さいものをシタコと区別し、三年目のもので標準形よりも小さいものをコサンサイと区別している。

(二) 産卵・孵化

金魚の養魚池は一反(三〇〇坪)を四分割して仕切って作られている。交配用の親魚の養魚池は一反を六分割して仕切って作られている。このほかに、約一坪の大きさのコンクリートで作られた水槽がある。養魚池をイケといい、コンクリート製の水槽をタタキという。弥富町天王割の生産者Y.M氏の場合、二〇〇〇年には、三六面のイケと一六面のタタキを使って、金魚を飼育している。それぞれのイケやタタキには、同じ品種で、同じ年齢、同じ大きさの金魚が入れられる。一つのイケやタタキに異なる品種の金魚が混在することはない。

三月頃に稚魚を入れるイケの準備を行う。イケから金魚をすべて出してから、イケの水を入れ替える。新しい水を入れる前に、イケの底には、消石灰をしいて、イケの土壌を酸性からアルカリ性に直す。水は木曾川からひいている。

二月頃から交配させる親魚の最終的な選別作業を行う。必ず

同一品種間で交配が行われる。異なる品種間の交雑は行われない。四月上旬から五月中旬に親魚が産卵をはじめ。産卵することをヘルという。卵を産みつけさせる藻のことをタモという。かつては、柳の根に産卵させていた。現在、ヒカゲノカツラ（和名ヒカゲノカズラ *Lycopodium clavatum*）を乾燥させたものや人工の網に卵を産みつかせている。卵が産み付けられタモをタタキに移して孵化させる。

親魚は三回くらいに分けて産卵をする。最初の産卵で孵化した稚魚をイチバンコ、二番目の産卵のものをニバンコという。孵化後、タタキからイケに戻すとき、産卵時期の異なる稚魚を、同一品種であっても、同じイケに入れることはない。

(三) 選別

イケに戻してから四〇日から四五日後に選別作業に入る。選別と

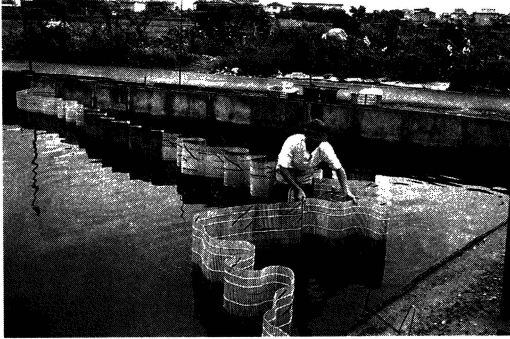


写真1 養魚池から金魚をすくい出す作業（スセヨ）

は、基準に合致しない不定形な金魚を淘汰することである。優良な金魚を作り出すために、選別は重要な作業である。五月から九月までの生育期間に、三回の選別作業が行われる。

選別はイケを単位として行われる。選別作業の前には、イケの中に簀をジクザク状に立てて金魚を一カ所に追い込んでいき、すべての金魚をすくい出す。これをスヨセという（写真1）。スヨセをした後にイケに残った金魚のことをスノコリといい、スノコリのないように注意が払われる。そして、すくい出した金魚を作業場（タテバという）へ移動する。直径約三〇センチメートルの白色ほうろうの洗面器に金魚を入れ、定形の基準に従って淘汰する。その基準に合致しない金魚をクズという。琉金の場合、3回の選別で八千匹から一万匹が残ることを目安にしている。（写真2・3）

選別して残った金魚を、さらに、大きさに



写真2 選別作業

より分類する。トオシという道具に金魚を入れると大きいものはトオシの中に残る。こうして大小を選別して別々のイケに戻す。しかし、同じイケの中でも成長過程で金魚の大きさが異なってくることがある。この状態をゾロとかゾロゾロという。ゾロの状態では、大きいものはそのまま大きくなり、小さいものは小さいままになる。餌を与えない日が続いたりすると、大きい金魚が小さいものを食べてしまうこともあるという。ゾロの状態の金魚は大小を選別して、別々のイケに分ける。

金魚は、体形、体色、目、尾や背鰭の形によって選別される。マルモン（体形が丸い金魚）の場合、体形が平たく細長いものや片目のものは品種に関係なくクズとして取り出される。さらに、品種別に異なる基準が存在する。琉金の基準は尾の形である。尾が二つに割れているのがよいとされる。次のようなもの



写真3 出目金の選別

はクズとして取り出される。尾がフナの尾のように一本尾になっている（フナオ）、尾が開いておらず閉じた尾が中央で飛び上がっている（ツمامミ）、尾が傾いており左右の開きが異なっている（ハネツリとかヒコウキという）、水温の上昇により尾が焼けたように切れ切れになっている（オヤケ）。

出目金の基準は尾の形と目である。尾がツمامミ、ハネツリ、オヤケになっているものを取り出す。出目金ではフナオはよいとされる。目の出が悪いもの、片目のもの（ガンチ）、両目がとれているものを取り出す。

和蘭獅子頭の基準は尾と背鰭の形である。尾が山のようにとがっているもの（ミツオ）、背鰭がとがっているもの（セトビ）や途中で切れているものを取り出す。成長してくると、サラサのオアカが特によいとされる。サラサのオアカとは、体形が丸く体色が白で、白い腹に赤い更紗を巻いているように赤い模様が入っており、尾の色が赤いものである。サラサのオアカの数は少ない。

丹頂の基準はチョビと体色である。チョビとは頭の上の赤い部分のことをいう。頭の上に少し赤色が出ているものがよいとされる。成長してくると、サラタンがよいとされる。サラタンとは更紗の丹頂のことで、腹の赤白の模様が更紗を巻いているように見えるもののことである。首の方に赤色が流れているものはナガレといって、これはクズである。体全体に白色か赤色が出ていようなものもクズである。丹頂の七、八割はクズに

なる。

七月末をすぎると、金魚は成魚としての形ができてくる。この時期の選別（三回目）は、淘汰というだけでなく、金魚の等級分けという意味合いも出てくる。①定形の基準に合致した金魚のうち、上位のものはタネ（交配用の親魚）の候補となる。親魚にする金魚は産卵期（翌年の三月頃）までに五回ぐらいの選別が行われ、最終的には、一年目の親魚は四〇〇匹から五〇〇匹になる。交配後も親魚の選別は行われ、三年目には一〇〇匹くらいまでになる（親魚の選別ではずされた金魚は市場用となる）。三年目の二〇匁くらいの親魚がよく卵を産むのでよいとされている。四年目の親魚はほとんどいない。②基準に合致し、親魚とならない金魚は市場に出される。早いものは一〇月頃から出荷されるが、満一歳になる翌年の三月頃が出荷の最盛期となる。③基準に合致しなかった定形外（クズ）のうち、上位のものは金魚すくい用として出荷される。④定形外の下位は淘汰される。七月末をすぎると金魚は赤くなってくるが、中には白くなるもの（シロ）があり、これは定形外である。また、定形よりも大きい金魚（トビ）や定形よりも小さい金魚（シタコ）も定形外である。しかし、シロやトビのアカ（大型の赤色の金魚）は金魚すくい用になる。トビのクロ（大型の黒色の金魚）やシタコ、片目が取れた出目金は捨てられる。五月から七月の選別（一、二回目）は人為的な淘汰であるが、八月から九月の選別（三回目）は人為的な淘汰であるとともに、金

魚の等級分けでもある。つまり、上位から純形（交配用）、定形（市場用）、不定形（金魚すくい用）、不良（淘汰）の四段階に分けられる。

（四）生育

金魚の成育過程における技術や知識は、イケの水の管理と餌の与え方にまともまってみられる。イケの水の管理には、酸素不足や病気、外敵の侵入を防御するというほかに、生育のために「水を作る」ことがある。イケの水に、米ぬか、鶏糞などを入れてミジンコやプランクトンを発生させる。プランクトンを発生させて水を緑色にさせることを「水を作る」という。プランクトンの発生が悪く水の色が薄いと、金魚の体色が黒ずんでくる。

ミジンコは金魚の餌である。ミジンコをツムシという。イケにミジンコがいないと餌が金魚へ均等に行き届かなくなるので、金魚の大きさが不揃いになる。金魚の餌には、ミジンコのほかに、フリエとタキエがある。フリエとは、粉末の餌のことで、ペレット（人工飼料）と米ぬかを混ぜたものを水面に撒いて与える。固形状の餌を焚いて作ることをエサタキといい、その餌をタキエという。バケツ一杯のペレット、一俵と四分の一の麦の粉、一俵の米ぬかを釜に入れ、釜の半分くらいまで水を入れて、約一時間半焚いて餌を作る。かつて、カイコのサナギ

と魚粉を焚いていた。五月から六月頃にはフリエを、七月頃からタキエを与える。一日おきに餌を焚き、焚いた日の翌日に、その餌を与える。タキエを食べさせすぎると、金魚の目のまわりがふくらんで飛び出してくる。それでも、金魚は食べ続け、死んでしまう。

(五) 市場

金魚の市場として、弥富町には、日本金魚卸売市場、弥富卸売市場、東海観賞魚卸売市場がある。一九六七年に市場ができる前には、生産者は仲買人に直接売っていた。競り売りは、それぞれの市場で週一回行われる。弥富卸売市場は月曜日、東海観賞魚卸売市場は水曜日、日本金魚卸売市場は金曜日と決められている。地元の仲買人のほかに、東京、大阪からも仲買人が来る。生産者は金魚をカンコ（底が簀になった木の箱）に入れて市場に出し、仲買人はカンコ一箱単位で買う。

市場の養魚池の中央に小屋があり、そこで競りが行われる。小屋では仲買人たちの間をカンコが一行になって流れてくる。カンコには同じ品種で、同じ形状、体形、体色、大きさの金魚がまとめられて、五〇匹から四五〇匹入れられている。それに対して、セリ人が「ランチュウ一五〇」（蘭鑄が一五〇匹入っているということ）、「サクラニシキ五〇」、「デメ四五〇」、「ニサイコメット二〇〇」（二年目のコメットのこと）、「シンラン

二〇〇」（蘭鑄のシンコのこと）、「ニサイマメラン一〇〇」（二年目の小型の蘭鑄のこと）などと呼び上げる。市場では、金魚は品種名をもとに、成長段階と大きさが組み合わされて分類されている。

セリ人の呼び上げに対して、仲買人が一匹あたりの値段を「センマル」、「テンマル」、「リチョウ」などと呼び上げる。それを受けて、セリ人が、その値段を繰り返す。〇はマル、一はセン、二はリ、三はカワ、四はツキ、五はチョウ、六はテン、七はカ、八はツ、九はガンである。後はそれぞれの組み合わせとなる。たとえば、センマルは一〇か一〇〇、テンマルは六〇か六〇〇、リチョウは二・五（二円五〇銭）か二五か二五〇などである。単位は品種に応じて自ずと決まってくるようである。値が決定すると、競り落とした仲買人はカンコに自分の番号が書かれた木札を投



写真 4 日本金魚卸売市場

げ入れる。ときどきセリ人が「センマル、バツカ」、「テンマル、バツカ」などということがある。バツカとは、複数の仲買人から同じ値段の声が上がることである。仲買人から値段の声が上がらないと、金魚の入ったカンコは仲買人の前を通り過ぎていく。この状態をナガスという（写真4・5）。

(六) 定形へ深化する技術

金魚飼育の地点研究から、飼育技術の特徴をまとめれば、一定の品種の中で、定形の基準（形状、体形、体色、大きさ）に合致した金魚を生育させる技術である。第二章で、日本の品種分類と命名法から、定形化された品種の中に美を深化させる志向性を抽出した。飼育技術からも定形の中で深化させる志向を



写真5 金魚の競り

とらえることができる。定形・深化の技術をふまえて以上をまとめてみよう。

- ① 飼育の品種において、生産者一人あたり五品種が維持されていた。既存の品種を細分する民俗分類はないが、同一品種内において成長段階と大きさによる分類が存在した。
- ② 産卵・孵化において、交配は同一品種間だけで行われる。異なる品種間の交雑は行われぬ。品種の純粋さが維持されるように性の管理がなされている。同一品種内でも、産卵時期の異なる稚魚は混在しないように管理されている。
- ③ 選別作業はこの飼育技術の特徴をもっともよく表している。品種ごとに定形の基準が存在し、その基準に従って選別が行われる。定形の基準に合致しない変形の金魚は淘汰される。中国で好まれるような変形を取り上げることはない。選別をとおして、基準にもっともよく合致する純形（交配用）、基準に合致する定形（市場用）、基準に合致しない不定形（金魚すくい用）、それ以下の不良（淘汰）に等級付けもなされる。
- ④ 異なる品種が同じ養魚池に混在することはないだけでなく、成長段階や大きさによっても混在しないように管理されている。養魚池の水の状態や餌のやり方によつて金魚が定形に合致しない形（変形）に生育しないように管理されている。
- ⑤ 市場では、規定の品種を単位として、成長段階や大きさ

によって分類され集荷されている。

周(一九九五・一二三)は、金魚すくいを中国では見たことがなく、それは日本独自のものと指摘している。金魚すくいの金魚は、七月末から九月の選別によって大量に出されるクズ(定形外の金魚)である。定形の基準に合致した金魚を飼育する方法は、同時に、大量の定形外の金魚を生み出すことでもある。つまり、金魚すくいは日本の定形・深化の飼育技術によって形成されたといえる。

写真6は浙江省杭州における岳王路花鳥市場における金魚である。品種ごとに金魚が白色の洗面器に入れられ、それが一〇〇個以上並べられている。中国では、この市場の形態に対応した変形・多品種を飼育する生産者の技術が存在するのである。中国の生産者の民俗技術はこれまでとらえられていないが、それは、本稿第二章で中国にお



写真6 浙江省杭州の岳王路花鳥市場で売られる金魚

ける金魚の品種分類で指摘した変形の中で拡大する志向性に対応した飼育技術ととらえ得ると予想される。

四 自然観の比較—内包化と外延化

金魚は「完全に人間のコントロール下で卵から親魚まで飼育されている魚」(周 一九九五・一一六)であり、それは「改変され凝縮された自然」である(鈴木 一九九七・二三四)。金魚飼育は「改造された自然」を対象とする技術であるといえる。「改造された自然」を対象とする飼育技術において、日本では定形の中で深化する志向があり、中国では変形の中で拡大する志向があることを指摘した。つまり、日本は定形に内包化する技術であり、中国は変形に外延化する技術である。中国における変形に外延化する技術とは、金魚飼育だけに見られることではない。たとえば、中国の湖羊は、特異な飼育形態により改造され作出された品種であり、一般的なしつじとは大きく異なる特性を持つ。湖羊飼育の形成過程には、自然の変形・改造への意欲の並々ならぬ強さがとらえられる(菅 一九九八)。それに対して、日本には湖羊のような家畜改良の技術や執着は見られず、自然の改造への志向は異なっている。

「改造された自然」への志向の差は、中国と日本における自然観の差を表している。「改造された自然」と人間の関係において、日本の自然観は定形への内包化であり、中国の自然観は

変形への外延化であるとまとめることができる。この自然観の対比は、金魚飼育のほかに、花卉・草木や盆景・盆栽の栽培からも指摘されることが予想され、ひいては、動植物の飼育栽培文化・花鳥魚虫文化研究として別出される可能性がある。

本稿の第一章において、比較民俗学は民俗要素の比較ではなく、民俗要素の束の構造的、体系的な把握をとおして抽象化された法則、論理、原理の比較であると指摘した。本研究は金魚をめぐる民俗要素の比較ではない。都市社会で生み出された動植物の飼育栽培文化・花鳥魚虫文化に普遍的な法則、論理、原理による比較を目指している。その目標のもとに、金魚飼育の研究をとおして自然観による比較の枠組みを提示し、自然観において中国と日本が異質である点を指摘した。金魚飼育の技術研究は動植物の飼育栽培文化・花鳥魚虫文化研究であり、そこから別出された自然観により比較民俗学は展開されねばならない。

注

(1) 篠原徹は、『北小浦民俗誌』に述べられた「移住から定着・「稲作への」融合」という筋道は……「佐渡一巡記」以来柳田が暖めていた農漁不可分な日本海岸の村の成立に「関する夢想」から産みだされた創作ととらえた(篠原 一九九〇・七四)。

(2) にもかかわらず、『北小浦民俗誌』をいわゆる重出立証法(民俗要素の集積・比較・綜合)の方法論的整備のために位置づけようとしたところに、千葉の矛盾がある。千葉(一九七六・一一九―一二三)は、地域における文化要素を構造的に把握し、その次の段階として、地域社会を交換することにより民俗構造の類型化を図ることを示したが、それは、国内比較の帰納的研究法の整備を目的としていた。

(3) 梅棹の論文を、柳田国男は「この方法は日本民俗学のいまだかつてこころみざるところ」と賞賛した(梅棹 一九九二・二九六)。このことから、宮田登は、「恐らくアプローチは異なっている」と、柳田の名作『北小浦民俗誌』が、コミュニティとしての漁村・海村の原理を求めていたことと共通している」と、梅棹論文と柳田の『北小浦民俗誌』を対比した(宮田、一九九二)。筆者は、『北小浦民俗誌』を移住者が陸地定着過程において稲作農民へ一元的に収斂されるという法則を提起した書ととらえる。宮田の指摘を敷衍していえば、梅棹の「ヤク島の生態」と柳田の『北小浦民俗誌』には、一漁村から漁村・海村の原理を抽出しようとする目的だけでなく、そこで提起された結論(島の移住に対する一元的把握と「グループ保存の原理」を背景とした「はだかの血縁原理の平均化作用」)にも共通点が見出される。

(4) このように対象地域の範囲を設定した後、「われわれは

こうした事例を多数積み重ねていく必要がある」と締めくくられており、宮田の地域民俗学は、国内各地域における地域民俗誌の集積と総合によって日本文化や歴史を再構成するための前提とも受け止められる余地(あいまいさ)を残した(宮田 一九七八・二四八)。

(5) 菅(一九九八、一九九九)や君塚(一九九五)では、日本と中国の比較はなされていない。中尾(一九八六)は、江戸時代の花卉園芸文化の発展を中国のそれと比較してとらえている。

(6) 金魚産地の愛知県弥富町の弥富金魚漁業協同組合作成の二〇〇〇年度版パンフレットには、新品種が加えられ、三四品種があげられている。松井があげた品種の中にはすでに絶滅したものもある。

(7) 周(一九九五・一一九)は、庶民における伝統的な金魚の餌を日本では麩として、北京のミジンコと対比した。しかし、筆者調査では、昭和三〇年代、日本の一般家庭でも、アカムシ(ユスリカの幼虫)、イトミミズ、ミジンコを金魚の餌にしていた。針金を輪にしたものを使って、ドブ川でアカムシやイトミミズを取っていたという。阿部(一九五五・一三五)によれば、昔「昭和二〇年代か」、神田川はイトメ(イトミミズ)の本場といわれ、本職の餌屋が神田橋の下に小屋を建てて住み、イトメ取りをして金魚の餌として売っていた。

(8) 丹頂という品種は一九五八年に中国から輸入された金魚である。中国の品種名は紅頭魚である(牧野 一九七〇・二二二)。

(9) 一九九六年の弥富町における金魚の生産量(尾数)をみると、上位三位までの和金、琉金、出目金で全体の七九・二%を占めている。四番目に生産量の多い金魚として「金魚すくい用」という括りであげられている。「金魚すくい用」は全体の三・五%を占めている(弥富町金魚漁業協同組合資料による)。

参考文献(アルファベット順)

- 阿部舜吾 一九五五 『金魚の常識』慶友社
安達喜之 一九九七 『金魚養玩草』(寛延元年) 佐藤常雄他(編)
『日本農書全集』五九・四一七～四四五 農山漁村文化協会
海部郡弥富農業補習学校調査部 一九三一 『弥富金魚』(謄写版印刷)
石田貞雄 一九九七 「江戸時代における金魚飼育」『日本農書全集月報』二五・六～八 農山漁村文化協会
伊藤康宏 一九九七 「解題 金魚養玩草」佐藤常雄他(編)
『日本農書全集』五九・四四七～四六三 農山漁村文化協会

- 君塚仁彦 一九九五 「近世園芸文化の発展—その背景と担い手たち」佐藤常雄他(編)『日本農書全集』五四・五〇二
- 三 農山漁村文化協会
- 国立歴史民俗博物館(編) 一九九九 『くらしの植物苑特別企画 伝統の朝顔』国立歴史民俗博物館
- 李素梅(編著) 一九九五 『實用養金魚大全』中国農業出版社
- 牧野信司・松井佳一 一九七〇 『熱帯魚・金魚 標準原色図鑑全集』一七 保育社
- 松井佳一 一九三五 『科学と趣味から見た金魚の研究』弘道閣
- 松井佳一 一九六三 『金魚 カラーブックス』三四 保育社
- 松井佳一 一九八七 『金魚文化誌—書誌学的考察』鳥海書房
- 松井佳一(編著) 一九七二 『金魚大鑑』緑書房
- 南方熊楠 一九七二 『金魚』『南方熊楠全集』四・一〇八、一一一 平凡社
- 宮田登 一九七八 『日本の民俗学』講談社
- 宮田登 一九九二 「梅棹先生の『民俗学博物館』構想」『梅棹忠夫著作集月報』一六・七〜八 中央公論社
- 中尾佐助 一九八六 『花と木の文化史』岩波書店
- 直江廣治 一九八七 『民間信仰の比較研究—比較民俗学への道』吉川弘文館
- 小倉学 一九五九 「能登千路の金魚販売商と地蔵尊」『日本

- 民俗学会報』七・三三〜三五
- 桜井徳太郎 一九八七 『東アジアの民俗宗教 桜井徳太郎著作集』七 吉川弘文館
- 佐野賢治 一九九〇 「橋の象徴性—比較民俗学的一素描」竹田旦(編)『民俗学の進展と課題』・四一三〜四三九 国書刊行会
- 佐野賢治 一九九六 「比較の視野—国際化の中の民俗学」佐野賢治他(編)『現代民俗学入門』・二二〜二七 吉川弘文館
- 佐野賢治 一九九八 「比較研究—郷土研究から日本文化論へ」福田アジオ・小松和彦(編)『民俗学の方法 講座日本の民俗学』一・一一五〜一二二 雄山閣出版
- 佐野賢治 二〇〇〇 「比較民俗学」福田アジオ他(編)『日本民俗大辞典』下・四一四 吉川弘文館
- 関敬吾他 一九八七 「座談会 民俗学の方法を問う」後藤総一郎(編)『柳田国男研究資料集成』一七・七九〜一四四 日本図書センター
- 下野敏見 一九九四 『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館
- 篠原徹 一九九〇 「世に遠い一つの小浦—『北小浦民俗誌』の解剖学」『国立歴史民俗博物館研究報告』二七・四七〜八七
- 菅豊 一九九八 「閉じこめられたヒツジたち—中国江南農耕社会のヒツジ飼育から見た商品経済の発展」『東洋文化研

究所紀要』一三五・九五〜一三九

菅豊 一九九九 「鬮コオロギからみた中国漢人都市民の自然

観」『北海道大学文学部紀要』四七(四)・二二五〜九二一

鈴木克美 一九八九 「魚観賞の文化史―観る楽しみの発見」

矢野憲一(監修)『魚の日本史 シリーズ自然と人間の日

本史』一・五六〜六一 新人物往来社

鈴木克美 一九九七 『金魚と日本人―江戸の金魚ブームを探

る』三一書房

鈴木満男 一九七四 『マレビトの構造―東アジア比較民俗学

研究』三一書房

周達生 一九九五 『民族動物学―アジアのフィールドから』

東京大学出版会

竹田且 一九九五 『祖先崇拜の比較民俗学―日韓両国におけ

る祖先祭祀と社会』吉川 弘文館

千葉徳爾 一九七六 「地域研究と民俗学―いわゆる「柳田民

俗学」を超えるために」和歌森太郎(編)『民俗学の方法

日本民俗学講座』五・八六〜一五〇 朝倉書店

梅棹忠夫 一九五一 「ヤク島の生態」『思想』三三二(七)・

三五〜四八 岩波書店

梅棹忠夫 一九九二 「追記二 柳田国男氏との出会い」『梅

棹忠夫著作集』一九・二九六 中央公論社

王春元 一九九四 『中国金魚』 金盾出版社

王占海等(編著) 一九九三 『金魚的飼養與觀賞』 上海科

学技術出版社

伍惠生・傳毅遠(編著) 一九八三 『中国金魚―鑑賞與養殖

大全』天津科学技術出版社

許祺源(編著) 一九九九 『金魚飼養百問百答』江蘇科学技

術出版社

許祺源・蔡仁遠(編著) 一九九六 『東方聖魚―中国金魚』

中国農業出版社

許祺源・許中雅(編著) 二〇〇〇 『中国名貴金魚』上海科

学技術出版社

薛守紀(編著) 一九九八 『花卉與觀賞魚』科学普及出版社

柳田国男 一九六八 「魚の移住」『定本柳田国男集』三・三

二四〜三二六 筑摩書房

柳田国男 一九七〇 「北小浦民俗誌」『定本柳田国男集』二

五・三六五〜四五四 筑摩書房

柳田国男 一九九〇 「民間伝承論」『柳田国男全集』二八・

二四七〜五〇六 筑摩書房

趙承萍等(編著) 一九九一 『金魚』金盾出版社

張紹華等(編著) 一九九三 『金魚錦鯉熱帶魚』金盾出版社